

一般選抜（B日程）

学力特待生選抜（B日程）

入学試験問題

国語

注意事項

1. 願書提出時に、この試験科目の受験を申請していない人は受験できません。
 2. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
 3. 解答は解答用紙の解答欄にマークしなさい。
 4. 解答用紙にある「マーク記入例」と「記入上の注意」をよく読みなさい。
 5. この問題冊子は、十四ページあります。
- 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「日本流」は開会式以外の競技の場面にもいろいろな形でみられる。陸上競技のスタートの号令が「位置について、用意」という日本語だったり、水泳競技の結果を告げる場内アナウンスが「一ちゃんーく、第五コース、シヨランダー君、アメリカ、じかーりーん、五三秒四」といった独特の抑揚（そもそも金メダリストを「君」呼ばわりするあたりの感覚も、今ではなかなかピンとこないが）であつたり等々、独自の「日本文化」満開で、これらもまた、ほとんど日本のローカル大会の延長線上のものであるように思える。

この陸上競技の「位置について、用意」という日本語合図に関わる歴史は実におもしろい。オリンピックでの合図が「オン・ユア・マーク、セット」という英語に統一されたのは、一九六四年の東京大会よりもはるか後、二〇〇六年の国際陸上の規則改正の折であり、それまでは英語、仏語と開催地の地元言語から自由に選んでいた（一九九一年の東京での国際陸上でもやはり日本語の合図が使われていた）。

日本での出発合図として「位置について、用意」が定められたのは、実は、一九二七年のことで、それ以前は必ずしも統一されていたわけではなかったようだが、「オン・ユア・マーク、ゲット・セット」という英語がそのまま使われることが多かったようである（最初の頃は意味がよくわからず、「安全マーク、下駄、雪駄」とやっていたなどという笑い話もあつたりする）。ところが興味深いことに、日本陸連が推し進めていた競技用語を **I** してゆくプロジェクトの一環として一九二七年に、この出発合図に使う号令についての日本語の公募が行われ、その結果、山田秀夫なる人の出した「位置について、用意」という提案が採用されたというのである。

今われわれが一般的にもっている感覚だと、「国際化」のためには、ローカルな日本語を捨てて英語を採用するという方向をたどるのが自然のように思われ、大正期にせっかく英語でやっていたのに、その後なぜわざわざ **I** したのか、などと思ってしまうそうである。ここでも何をもって「国際的」と考えるかということについての根つこの部分で考え方が行き違っているのではないかと思わされる。これはべつにスポーツの世界だけの話ではない。この話から私などが真つ先に思いつくのは、オペラの「**II**」と「日本語上演」をめぐる動きである。

今ではオペラは、原作の言語で上演するのが一般的である。一昔前までは日本語訳詞による上演が広く行われていたが、いつしか原語でなければ「本格的」な上演ではないかの如くに扱われるようになり、日本語上演を推進してきた人々は、日本のオペラの発展を阻害した戦犯呼ばわりされることにもなった。だが、何が「本格的」かは、多分に文化的コンテクストで決まる。大正期や昭和初期の文献には、Ⅱより日本語上演の方が「本格的」である旨の記述がしばしばみられる。この時期、西洋に学びつつ日本固有のオペラ文化を形作る仕事こそ「本格的」と考えられていたのであり、Ⅱはそのための一ステップにすぎなかった。一九一一年に帝国劇場で《カヴァレリア・ルスティカーナ》がⅡされた際には、「本格的」な訳詞が準備できないためにやむをえず原語のまま上演するとの弁明までなされている。言ってみれば、自国の言葉ベースにした文化をすっかり作ってゆくことこそが、世界に出して恥ずかしくない、近代国家にふさわしい「国民文化」のあり方だと考えられていたのである。

これは日本だけの話ではなく、とりわけ西洋の「a シュウエン」に位置した東欧や北欧などの諸国などにもよくみられることである。十九世紀末、ブダペスト国立歌劇場に赴任した若き日のマーラーがワーグナーの《指環》四部作のハンガリー語上演を担当したという話が示すように、これらの国でも、自国の「国民文化」としてのオペラの構築は至上命令であり、そのためにすべて自国語に訳して上演することが求められた。その意味では、「原語主義」は、ドイツの歌劇場にも日本人や韓国人の歌手があふれ、「国民文化」という概念自体が空洞化してしまった近年の状況下で編み出されたⅢにすぎないということにもなるのであり、近代国家たらんとした日本が、まずは世界の先進国にbヒツテキするオペラ文化を自国語によつて築き上げなければならぬと考えたのも、また当然のことだったのかもしれない。「位置について、用意」という日本語の響きからもやはり、自国語による文化を確立しようとして体を張ってきた人々の同様な矜持が感じとれる。

だからといって、日本人が「日本語中心主義」をとつて②外国人とのコミュニケーションを拒否しようとしたなどと考えるはならない。東京オリピックで男子一〇〇メートルなどのスターターを務めた佐々木吉蔵の著書『よいいドン！』スターター三〇年』（報知新聞社1966）には、日本語の「位置について、用意」という合図で外国人選手に良いスタートを切ってもらうために、各国選手の練習しているグラウンドに何度も通い、交流を深めながらピストルのタイミングをⅣした話が出てくる。ここには、一方で日本語をベースにして自らの文化を積み重ねつつ、それを何とか世界に開い

てゆこうとする強い意志が感じられる。そこにある「もうひとつの国際化」の姿は、「国際化」というと「英語帝国主義」的なあり方しか思い浮かばなくなってしまう今のわれわれに対して、X ようにすら思える。

第二次大戦後の新時代の日本の出発点となった一九六四年のオリンピック東京大会であるが、仔細にみてゆけばゆくほど、そこには戦前から引き継がれた人々の心性や感性の残り香のようなものが感じられてくる。「戦前」と「戦後」というソザツな二分法のもとでかき消されてしまっていたそのような部分を丹念に跡づけてゆく中から現れ出てくる「もうひとつの世界」は、われわれが日頃認識している世界が、文化のもつ多様な可能性のほんの一部に過ぎなかったことを実感させてくれるとともに、「日本文化」の歴史や現在についての新たな視界をひらいてくれることになるのではないだろうか。ここではとりわけ、ラジオの実況中継放送と公式記録映画という、メディアに関わる問題を切り口とすることで、人々がこのオリンピック大会にどのようなまなざしを向け、それを表象し、記憶しようとしたかということに焦点をあてて、そこに刻み込まれている文化の「古層」を摘出してみることを目指すことにしようと思う。

(渡辺 裕『感性文化論』による。ただし、出題に際して、字句や表記の改変、段落の変更・省略などを施した箇所がある。)

問一 傍線部ア～ウの漢字の読みとしてもつとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 ア＝1、イ＝2、ウ＝3)

ア	阻害	[1]	ぼうがい	[2]	ひがい	[3]	そがい	[4]	かんがい	[5]	そそがい
イ	仔細	[1]	しょうさい	[2]	しせつ	[3]	しさつ	[4]	しさい	[5]	こさい
ウ	丹念	[1]	にゆうねん	[2]	にねん	[3]	ねんいり	[4]	たんねん	[5]	たんにん

問二 傍線部 a、b、c の片仮名の太字箇所を用いる漢字としてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 a || 、b || 、c ||)

a	シユウエン	[1]	円	[2]	園	[3]	宴	[4]	縁	[5]	袁
b	ヒツテキ	[1]	的	[2]	敵	[3]	適	[4]	摘	[5]	滴
c	ソザツ	[1]	祖	[2]	素	[3]	粗	[4]	疎	[5]	組

問三

I、 IV に入るものとしてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 I || 、II || 、III || 、IV ||)

I	[1]	邦語化	[2]	国際化	[3]	古典化	[4]	理想化	[5]	現実化
II	[1]	独語上演	[2]	本場言語	[3]	原語上演	[4]	仏語上演	[5]	本場実演
III	[1]	秘策	[2]	苦肉の策	[3]	極限状況	[4]	策略	[5]	謀略
IV	[1]	紆余曲折	[2]	試行錯誤	[3]	悪戦苦闘	[4]	五里霧中	[5]	暗中摸索

問四

傍線部 A・B の意味としてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 A || 、B ||)

A 矜持が感じとれる。

[1] 貫録を感じることができると。

[2] 努力の跡がわかること。

- [3] 頑固なこだわりを感じるができること。
- [4] 自信や誇りを感じることができること。

B 心性や感性の残り香のようなものが感じられてくる。

- [1] 日本人としての考え方を残すことの重要性が感じられる。
- [2] 日本人としての感覚を大切にすることが重要視されている。
- [3] 日本人として生まれながらもっている心や感覚が感じられる。
- [4] 日本人としての感覚や心を残すことの大切さが実感できる。

問五

X

に入る言葉として、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

13

)

- [1] 一発触発している
- [2] 問題を回避している
- [3] 大山鳴動している
- [4] 一石を投じている
- [5] 膝を交えて話している

問六

破線部①「近代国家にふさわしい「国民文化」のあり方」とあるが、「近代国家」として必要だとされていることについて、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

14

)

- [1] 全ての言語に対応可能な文化水準の保持
- [2] 西洋化に合わせた自国文化の形成
- [3] 世界規模の自国文化の保有

- [4] 自国語を基盤とした文化の確立
- [5] 日本固有のオペラ文化の形成

問七

破線部②「外国人とのコミュニケーションを拒否しようとしたなどと考えるはならない」とあるが、この言葉の意
 図として当てはまらないものとして、もつとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

15

)

- [1] 「国民文化」を世界に開いていこうとする強い意志への敬意
- [2] 単なる自己中心主義とは異なる矜持への好感
- [3] 視界が狭まっている「日本文化」への忠告
- [4] 交流や対話のみが「国際化」への近道だとする主張
- [5] 現代の視点のみで短絡的に考えることへの注意喚起

問八

本文の内容と合致しないものとして、もつとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

16

)

- [1] 陸上競技の日本語合図に関わる歴史をみると、一九九一年の国際陸上では、出発合図として「位置について、用意」が用いられていた。
- [2] 一九一一年の《カヴァレリア・ルスティカーナ》上演の際の弁明からは、「本格的」オペラについての今昔の認識の違いがうかがえる。
- [3] 十九世紀末、ブダペスト国立歌劇場のオペラ上演の例からは、ハンガリーでは原語による上演が率先して行われていたことが察せられる。

[4] 何をもって「国際的」と考えるかという根っここの部分には、それぞれの国における文化的コンテキストと、国際化を推進する人々の矜持が大きく関わっている。

[5] 「日本文化」の歴史や現在についての新たな視界をひらく上で、「戦前」「戦後」の二分法だけではない別の観点からの検討も有効である。

問九 大正前期の白樺派のリアリズムを代表し、『城の崎にて』『暗夜行路』などの作品で知られる作家として、もつとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号)

- [1] 谷崎潤一郎 [2] 永井荷風 [3] 森鷗外 [4] 夏目漱石 [5] 志賀直哉

問十 ことわざ・慣用句の空欄 に入るものとしてもつとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 ① || , ② || , ③ || , ④ || , ⑤ ||)

- の頭も信心から
 を読む
 の滝登り
腐っても
 登り

- [1] 鯖 [2] 鰻 [3] 鯛 [4] 鯉 [5] 鯛 [6] 鮭 [7] 鱈

問十一 次の漢字の組み合わせでもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号

あ ||

23、

い ||

24)

⑥ **カンセイ**

① **カンセイ** な住宅街に住む。

② **カンセイ** が豊かな子ども。

③ **カンセイ** を上げる。

④ **カンセイ** の法則。

⑤ **カンセイ** はがきで応募する。

[1] ① 閑静

② 歓声

③ 喚声

④ 完成

⑤ 官製

[2] ① 感性

② 閑静

③ 歓声

④ 慣性

⑤ 完成

[3] ① 閑静

② 感性

③ 管制

④ 慣性

⑤ 官製

[4] ① 感性

② 歓声

③ 完成

④ 閑静

⑤ 管制

[5] ① 閑静

② 感性

③ 歓声

④ 慣性

⑤ 官製

⑦ **コウシヨウ**

① **コウシヨウ** な趣味。

② 展示の時代 **コウシヨウ**。

③ 担当者と **コウシヨウ** する。

④ 民間に **コウシヨウ** されてきた。

⑤ **コウシヨウ** 一万人の会員数。

[1] ① 交渉

② 考証

③ 口承

④ 校章

⑤ 口誦

[2] ① 高尚

② 公証

③ 交渉

④ 口承

⑤ 公称

[3] ① 高尚

② 考証

③ 交渉

④ 口承

⑤ 公称

[4] ① 高尚

② 公証

③ 口承

④ 口唱

⑤ 校章

[5] ① 高尚

② 公証

③ 交渉

④ 口唱

⑤ 公称

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、本文中の【新学】は賀茂真淵『新学』を引用した箇所であり、「按ずるに」以降は著者の見解を述べた部分である。

【新学①】何ぞといへば、よろづのものの父母なる天地は春夏秋冬をなしぬ。そが中に生るるもの、こをわかち得るからに、うたひ出づる歌の調もしかなり。また、春と夏と交はり秋と冬と交はれるがごと、彼此をかねたるも有りて、くさぐさなれど、おのおのそれにつけつつ宜しき調は有るめり。

按ずるに、ここに天地の運行になぞらへて、うたひ出づる歌の調もしかなりと云へるをみれば、またさる意をも得たるに似たれど、こは尋常からん理りに随ひていへるのみにて、恐らくは己が処るところの実論にはあらじ。さては、前に後にその意あは（1）なり。すべて議論高しといへども、空言にして誠実なれば、声を逐ひ影を捉るに似て、なかなか初心の感ふべきものぞ。いかで新学のたよりとならん。これを懼れて己がどちの為にいささかその見る所を書い付くのみ。

【新学②】しかれば、古へのごことを知る上に、今その調の状をも見るに、大和国は丈夫国にして古へはをみなますらに習へり。かれ、万葉集の詞は凡丈夫の手ぶりなり。山背国はたをやめ国にして丈夫もたをやめをならひぬ。かれ、古今歌集の歌は専ら A の姿なり。

按ずるに、大和の国を丈夫風、山城の国を手弱女風の国なりといへるは、ただ世の聴を驚かすのみならず、且その徴ありげなば、誰もさこそと思ふべし。まことその説の如くならんには、後世も大和の国は B なるべく、往古も山城の国は

C なるべき理りなり。然るに、古へは大和も山城も丈夫風にして、後は山城も大和も手弱女風なるはいかに。いと怪しむべし。また次に、つよくかたきを丈夫風とし、のどかにさやかなるを手弱女風とせるも従がたし。こは、御世御世流行るるすがたありて、万葉集の頃は質朴にして木強く、古今集の頃は文華に移りて清柔なるべし。さるは、時運のしかる所に於て、唯一国の上にかけて論らふべき限りにはあらず。所謂さやかなるは文華の風化にしておのづから都風なるべく、強きは質朴の氣象にしておのづから鄙俗たるべき理りなり。その世の情態かくいささかも偽なきぞ道の正しき調なりける。されば、文も質もその実にしもかなはば、孰れをとりいづれを捨てん。然れども、つよき世はつよきながらにして女歌はめめしく、さやかなる世はさやかならにして男歌はををしく、その躰さらに同ふべきものに非ず。されば、昔今の風俗をかたる

に、男女をもていへるはいとも惑はしくて比類を得ずといふべし。この論なほ次にいへり。

【新学③】仍て、かの古今歌集に六人の調を判るに、のどかにさやかなるを姿を得たりとし、

按ずるに、是は彼の序に「僧正遍昭は歌のさまは得たれどもまこと少なし」とあるをいへり。こは歌仙の上につきて且くその得失を論らへるにて、実少なしといへるに對へて、その躰をば得たりといふのみ。この躰をと抽出でて世の標準とせられしには非（1）なり。されば、余の歌仙はその躰を得ずといふには非ず。各さるべき躰なからんや。中に就きて遍昭にのみ取立ててそのさまをいふべき謂れあり。その歌を味はひて知るべきものなり。また、遍昭の歌は澹率たる調はあれど優閑なる躰はなし。すべて往古の歌を D といひ、後世の歌を E といへるも、うちまかせては的当ぬ事なり。されどまた、つよしといひさやかなりといへる、傍らのみは且く得之ざるにもあらねば、いへるに従て論じおきぬ。

【新学④】強くかたきをひなびたりといへるは、

按ずるに、是も彼の序に、「文室の康秀は詞は巧みにてそのさま身におはず。いはば商人のよき衣きたらんが如し」といひ、また、「大友の黒主はそのさまいやし」などいへるをさせるなり。まづ、康秀の歌を鄙しき躰にいへりと見たるはいみじきひが事なり。彼の序の評は、詞の華過ぎて心の実に称はざるをいへるにて、更に鄙しとせしに非ず。今は賈人の喩へに泥みて、「其躰近俗」と書ける真字序の説を受けし古説につきていへるものなり。

（『新学異見』による。ただし、出題に際して、字句や表記の改変・削除などを施した箇所がある。）

【注】時運：時代の推移。

文も質も：「文」は前文の「文華」、「質」は前文の「質朴」のこと。

彼の序：『古今和歌集』の仮名序。

実少なし：歌いぶりが軽くただけていて、深く感じた気持ちの表れが乏しいこと。

躰をば得たり：表現が上手であると賞賛すること。

賈人：商人。

泥みて：とらわれて。

其躰近俗：其の体は俗に近し。

問一 (1) に共通して入るものとしてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

25

)

- [1] ず [2] ぬ [3] さい [4] ざり [5] ざる [6] ざれ

問二 波線部 a と d の「ぬ」は文法的意味によつて分けるとどのようなになるか。その組み合わせとしてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

26

)

- [1] a | b c d [2] b | a c d [3] c | a b d [4] d | a b c
[5] a b | c d [6] a c | b d [7] a d | b c [8] b c | a d

問三 本文中の **A** と **E** に入るものの組み合わせとしてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

27

)

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---|-----|--|---|------|--|---|------|--|---|-------|--|---|-------|
| [1] | A | 丈夫 | | B | 手弱女風 | | C | 手弱女風 | | D | かたし | | E | のどかなり |
| [2] | A | 丈夫 | | B | 手弱女風 | | C | 丈夫風 | | D | かたし | | E | のどかなり |
| [3] | A | 丈夫 | | B | 丈夫風 | | C | 手弱女風 | | D | のどかなり | | E | かたし |
| [4] | A | 手弱女 | | B | 手弱女風 | | C | 丈夫風 | | D | のどかなり | | E | かたし |
| [5] | A | 手弱女 | | B | 丈夫風 | | C | 手弱女風 | | D | かたし | | E | のどかなり |
| [6] | A | 手弱女 | | B | 丈夫風 | | C | 手弱女風 | | D | のどかなり | | E | かたし |

問四

【新学①】【新学②】に対する著者の考えとしてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号) 【新学①】 || 28、【新学②】 || 29 ()

【新学①】

- [1] 天地の運行のように、歌われる歌には四季の違いがあることを発見した点は評価できる。
- [2] 新学の論はしかるべき理論に従っているだけで、おそらく自らの体験に基づく実論ではない。
- [3] 新学での主張は前後で矛盾しているように見えるが、結論については一貫している。
- [4] 新学での主張は賛同できるが、説明がわかりにくく初学者は迷うだろう。
- [5] 新学で展開されている主張は絵空事であるが、誠実さを感じることはできるものである。

【新学②】

- [1] 大和の国が丈夫風、山背の国が手弱女風ということは、世間では到底受け入れられないだろう。
- [2] 古今の歌風を比較して論じる時に男性的、女性的といった比喻を用いるのはわかりやすい。
- [3] 強く堅い感じを男性的、穏やかで清らかな感じを女性的とする主張については納得できる。
- [4] 歌風が変化する理由は、時代の推移によるもので一つの国の特色として論じるものではない。
- [5] 歌の特色が万葉集の頃と古今集の頃とで異なっているのは、都の場所による影響が大きい。

問五

二重傍線部「歌仙」の組み合わせとしてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号) 30 ()

- [1] 僧正遍昭・大伴黒主・文屋康秀・小野小町・喜撰法師・在原業平

問六

- [2] 僧正遍昭・大伴黒主・文屋康秀・小野小町・喜撰法師・山上憶良
- [3] 僧正遍昭・大伴黒主・文屋康秀・清少納言・喜撰法師・山上憶良
- [4] 僧正遍昭・大伴黒主・文屋康秀・清少納言・和泉式部・在原業平
- [5] 僧正遍昭・大伴黒主・文屋康秀・藤原俊成・和泉式部・清少納言

傍線部①「商人のよき衣きたらんが如し」とはどういうことを説明したものとしてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

31

)

問七

- [1] 言葉の使い方が優れており、商人が作った歌とは思えないこと。
- [2] 修辭が過剰で、歌おうとする実情にふさわしくないということ。
- [3] 歌人が作った歌らしく、修辭も気持ちの表れも見事であること。
- [4] 素人が作った歌のように深く感じた気持ちの表れが乏しいこと。
- [5] 努力して富を築いた商人のように、努力が伝わる歌であること。

I

なさい。
I
に入る文の現代語訳としてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

32

)

- [1] このように、仮名序では遍昭と康秀の歌をいやしいと評したのである。
- [2] このように、仮名序では遍昭、康秀、黒主の歌をいやしいと評したのである。
- [3] そうであるので、仮名序でいやしいと評されたのは黒主の歌のみである。

- [4] そうであるので、仮名序でいやしいと評されたのは康秀の歌のみである。
 [5] そうであるので、仮名序でいやしいと評されたのは黒主と康秀の歌である。

問八

国学について説明した次の文の()に当てはまるものとしてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 (1) || 33、(2) || 34、(3) || 35)

国学は、賀茂真淵によって確立された。真淵は特に『万葉集』の研究に力を注ぎ、『万葉考』を著すとともに、歌人としても(1)という万葉調の歌風を提唱した。真淵の門下である本居宣長は、三十余年をかけて(2)を完成した。宣長の文献学的・実証的学問は本居春庭などに受け継がれ、古道・日本精神追求の方向は(3)らに継承されていった。

- | | | | | | | |
|-----|-----|---------|-----|--------|-----|--------|
| (1) | [1] | いにしへぶり | [2] | からくにぶり | [3] | たをやめぶり |
| (2) | [1] | 『万葉代匠記』 | [2] | 『古事記伝』 | [3] | 『おらが春』 |
| (3) | [1] | 良寛 | [2] | 契沖 | [3] | 平田篤胤 |
| | [4] | 荷田春満 | [5] | 小林一茶 | | |